

武士のおこり

国司は、新しい開墾地にも重い税をかけた。



有力な農民 ←← (争い) →→ 国司



(争い) 武力を使う



農民

・争いときには、一族・下人とよばれる

従者を率いて戦った。

これが () のおこり

武士は、有力な豪族のもとに結集して () をつくった。

任期の終わった国司などもそのまま地方に住みつき、各地の武士を家来として、勢力を伸ばした。

中でも、有力なものは、() と () である。

◎ 地方での反乱

10世紀前半 ◎下総国(千葉県・茨城県)

() は、兵をひきいて北関東の国府を襲い() を追い出した。そして、「新皇」と称した。

◎伊予国(愛媛県)

役人であった() は、海賊をひきいて、瀬戸内海周辺の国府を襲うなどした。

朝廷は、この2つの反乱を他の豪族の力を借りておさめた。

◎ 荘園の発展

地方では、豪族が土地の重い税負担をのがれるために、中央で大きな力を持っている() 氏) や大きな寺社にたのみ、国司の力を取り除こうとした。

() 氏) らは、引きかえに土地を() として寄進させ、() を出す約束をさせた。

荘園の持ち主となった貴族や寺社を() という。

寄進した豪族は、地元において荘園の管理者となった。

◎ 東北地方の豪族

東北地方でも、有力な豪族が() として成長したため、朝廷の支配がおとろえた。

11世紀後半 陸奥の国司・源頼義とその子() は、支配に従わない豪族を攻め滅ぼした。

() の役) () の役)

その後、陸奥の豪族() が力を伸ばして東北地方を1つにまとめ、独立国のような勢力となった。

平泉(岩手県)には、壮大な() を建てた。

()

将門の首

「新皇」を名のった平将門も最後は敵の放った矢が頭を射抜き、落馬したところで首をとられたという。その首は京へ持っていかれ、さらし首にされた。ところが、その首は3月まで色を変えず目もふさがなかった。それどころか、夜な夜な「切られし我が五体、何れの処にかあらん。此に来たれ。頭続いて今ひと戦せん。」と叫んだ。その後首は火の玉となり、関東方面へ飛び去ったともいわれる。将門の首の話は近代になっても続く。東京都で、ある工事中に事故が続いて起こった。おかしいと調べてみると、そこにはかつて将門の首塚があったことがわかった。そこで工事を中止し、改めて首塚をまつり直したという。

